

戦争体験談(平和の大切さ)

すずきやすこ
鈴木保子さん

私は恐ろしい戦争を直接体験したわけではありません。ここ魚津市も空襲があったわけではありません。でも、戦後の苦しい時代を経験していますのでお話ししたいと思います。

富山大空襲があったとき、私の家は真成寺町にありましたが、その近くに多くの人が住んでいる寺町があって、そこから「次は魚津に来るぞー」と防空頭巾をかぶって、みんな逃げています。病気の弟がいたため、私たちはこの子をおいて逃げるわけにはいかなかったのです。父は出征していて母と子どもと年寄りだけでしたので、ここにいようと言って逃げませんでした。

一緒に暮らしていた伯父は、3月10日の東京大空襲に遭って、魚津へ来ていましたので、家には伯父が使っていた防空頭巾や罹災証明書がありました。伯父が住んでいた東京の神田区末広町は、東京大空襲で一番最初に爆撃された土地だと思います。この罹災証明書は東京が出していて、配給証明書もついた切符制になっていました。お米は一人450g、みそ1人10g、しょうゆ1勺ということで5日分の配給がしてありました。これは戦争当時の貴重な資料であり証拠だと、子どもたちに伝えています。

戦争が激しくなってくると、国が作務衣を女性も着るように奨励してきました。最初は嫌がっていた女性たちも、いざ着てみると動きやすいし、洗濯も乾きやすいので、日常着として着るようになりました。食べ物もだんだん少なくなってきた、お米がなくて、少しでもお腹をいっぱいにするために、朝食に茶碗一杯の大豆が入れてあることがよくありました。

とにかく物が不足している時代で魚津でも物々交換して、欲しいものを手に入れたので、家のたんすにしまってあった着物がほとんどお米に替え

られたものです。

私の父は、昭和 19 年に出征しシナのチュウシにいて、上等兵にまでなりましたが、あるとき上司から「おまえは一人で別の場所へ行って仕事をなささい」と言われました。どうしてだろうと思いながら、仕事をし終戦を迎えたが、そのおかげで翌年には魚津へ帰ってくることができました。一緒にいた他の人たちはシベリアへ連れていかれて大変な思いをしたようです。

出征していった家族からなんの連絡もなく、消息も分からない家族は、どんなにか心配したことでしょう…。

戦後 70 年が経ち、平和ってこんなにいいものかということ、何でも手に入る、何でも好きなことができる、あたりまえになっているが本当の平和を知ってほしいと思います。色んな本を読んだり、DVD を見たりして、知って理解して欲しいです。子や孫には、私が経験したようなことは絶対にしなくて欲しくありません。